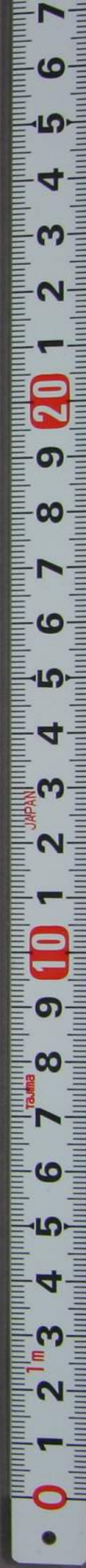


千八百七十七年一月六日發行
東京タイムズ新聞抄譯

3904



114
A2799
2

日本國域外裁判權論

千七百七十

天保十一年六月六日
大隈侯爵邸寄贈

本論ニ就テ當新紙ノ部内ニ重刻セル箇条中ニ

ハ倫頓及ヒ支那電報(新聞紙ノ一種ナリ)ニ憑リ熟考思慮

ヲ以テ日本國域外裁判權ノ要件ヲ商議セラレ

リ。是場合ニ於テ提起セラレタリキ評註ノ厚情ヲ擔

認スル能ハザルニ非レ氏談標題ニ近接スルニ

及テ西方記者ノ檢閲ニ出テタル一二ノ重要

ナル主意ニ於テ我輩ノ記認スル能ハザル者ア

リ。曰ク日本支那土耳其及ヒ自餘ノ諸國ニ就テ

第一ニハ日本支那土耳其及ヒ自餘ノ諸國ハ或

ハ開化ノ同等平行ニ盡ク至レリヤ第ニニ齎要
セル外國裁判權ノ体裁ハ若シ欲諸國ニ於テ悉
ク一様ナリヤト言ヘルハ習慣トナレリ。斯ノ如
キ假想ハ何レモ正シキ^考非ザルナリ。歐米人ハ
日本國ノ地位ハ土耳其基支那波斯暹羅或ハ巴爾
巴里亞領ノ地位ト眼前甚タ異ナルヲ拒辭セザ
ルベシ而シテ問フ者皆日本ニ在テハ外國人ガ請
求スヘキ所要ノ土耳其基支那波斯暹羅巴爾巴里
亞等ニ於ケルヨリハ却テ尚ホ嚴密ナルヲ以テ
自ラ満足スルヲ得ベシ。之レヲ例センニ日本

國ニ對シテ適宜ニ与ヒ得シ信任ノ同度ニ波斯
ヲ容ルスト誰カ敢テ之レヲ稱述スルモノアラ
ンヤ。然リ而シテ其敢テ説ク者ナクレバ波斯ニ許
可セシ裁判權ノ上等特例ハ何ノ基址テ因テカ
拒絶セラル、乎。且リ又拷問ノ議論ハ其向フ所
當ニ一條而已ナラズ多條ニ關涉ス可キ者ナリ。
拷問ノ廢止ヲ決定スルニハ日本政府ガ聊カ先
見預知セル所ノ難莫ニ爭フガ為ノミ帝國ニ於
テ拷問ノ不正及ビ其ノ習慣ノ徒然無益ナルヲ
了悟セサルカ如キ蒙昧ナル官吏ハアラザル

ナリ。然レ凡人民ノ心意就中多クハ下等社會僱
人ノ心意ニ於ケルヤ久シク相投合セルモノア
ルニ因ヨリ壹ニ白狀ヲ究問スルノ法而已ナラ
ズ且又罪科ノ定規罰則ノ一トシテ拷問律モ置
カル、ナリ罪戾ヲ強迫シテ首認セシムル企謀
ノ無益ナルトハ政府ノ各部署ニ在テモ充分ニ
通曉サル、ナリ。然リ而シテ若シ夫レ拷問ハ他
ノ目途無キ者ナリト民心一般ニ之レヲ理解セ
シトナラバ既ニ已ニ數年前ニ於テ其ノ廢止ハ
容易ノ事件ナリシナラシ。然リト虽モ忽然拷問

ヲ除クルカ為ニ同科ノ刑罰ガ一時ニ代替ス
ル能ハザルニ罪過ニ于係シテ一ツノ畏レヲ追
除スル者ト久シク信用セムナリ。西洋ノ國民タ
ル者衆庶異口同音ニ之レヲ不費用ニ且ツ不適
当ナル者トシテ人民ヲ呵責スルニ至テモ成立
セル正路ト為シタル嚴肅ヲ倉卒ニ廢棄スルノ
不便利ニナルト勿論今更ニ疑惑スル者ナカル
ベシ。拷問ノ種類ナル公ケノ答刑ハ未ダ合衆國
ノ諸部ニ於テ便用セリ且又英國ニ在テモ其行
ハル、ヤ世人ガ皆知ル所ナリ古代ト及ビ野蠻

種属が用ユル真ノ拷問ハ不列顛国ノ設立ト其
ノ盛カニ拘ハラズ抑士ニ於テ時宜ニ依テ行ハ
レリ。ミナウア神ノ如キ智慧ノ改正ト日本国ヲ感
動スル腦漿ノ單ナル閃光ニ依テ緊急ナル行為
ニ向テ外形ノ完成ニメ適當ナルトヲ生スル
ヲ日本国ニ期望スルヲ得ハ日本国ノ為ニ恭賀
スベシ。外国民ガ徐々ニ且ツ遠慮シテ盡カセル
ニ因テ改正ヲ整齊スルニ敢スベキノ改正ナリ
然レモ我輩信スルニ日本国ハ夫ノ奇異特別ノ
政治ヲ做者トシテ華麗人ヲ排場スルノ名望ヲ

欲セザルナリ而シテ日本国ガ革命年間ニ往々
苛酷ナレモ屢々殊ニ實心ノ憐恤ヲ以テ日本國
カ往時ニ搭兼シタル處置及ビ後世ニ於テノ參
考トスルノ處置ヲ批評スル諸国ノ如ク内部進
捗ノ善成果ナリト表明スルニ至テ満足ス可キ
ナラン。

日本區域外裁判權說

千八百七十七年一月六日發行

日本ノ外國ト條約ニ於ケル日本國裁判權ヨリ
 外國人民ヲ除去シ而シテ外國人民ヲ彼等自己
 ノ管下ニ置クノ關係ヲ有セル夫ノ域外款條
 ノ成立ニ就テハ既ニ數年來日本人民ヲ甚ク
 耐ヘ得難キ程感觸セシメタリ。實ニ該法度ハ強
 堅ナル者ナリ而シテ緊密ニ該法度ヲ約立セラ
 レタル國ハ最早該法度ガ其國民特立ノ体面ヲ
 侵凌スルニ至ルモ之レヲ拒絶スルヲ能ハサル
 ナリ。然ルニ同時ニ此ノ^{法度}修整ガ肝要ナリシト

及ビ實莫ノ点ニ於テ日本支那土耳其及ビ同形
ナル他邦ニ於テ成立セル法律ノ完全備具セサ
ルヲ如何ナル^難アルモ外国ノ親和ヲ維持ス
ルハ行ハレ難クアル可キヲ拒ハムハ誰タリト
モ為シ得難シ。今日本ハ土耳其及ビ支那一
般ニ世界ノ一^帝国ナルモ其体面ニ對シテ常ニ蔑視
セラル、ノ組織ニ瞞騙セラレシカ為自ツカラ
攪亂^{以實}セリ而シテ時々其ノ瞞騙ニ反シテ種々様
様ニ明告シテ受ケザルコトアリ。然レモ日本國ハ
其ノ^經國ト異ナツテ完ク實地鑿鍊ノ精力ニ於

テ是^等體ヲ取扱ヘリ。日本國ハ其地位ノ如何ニ
モ微弱ナル点ニ属在セルコトヲ悟リ以テ善ク自
ラ鼓舞作興シ至極ノ勉強ヲ用井タリ。合法ナル
改正ノ為ニ其最モ緊要トスヘキハ日本國モ之
レヲ充分ニ認メ既ニ外國ニ於テ編纂セル律例
成典ニ倣ハンガ為メニ現今甚ク讀補ス可キ程
法理ニ拮据綢繆セリ。倂然ルニ只今到着セル郵
信ニ因レバ拷問律ヲ廃止スルノ羨績アルヘキ
公布ガ發セラレタリ。是新聞ヲ閱スルニ吾輩中
心悅喜ノ無極知ルベシ。此ノ拷問ノ一大^瑕缺ハ

支那及び教多ノ垂細垂國ト一般ニ日本國ニ於
テ想起シ難キ取代ヨリ成立セリ而シテ日本國ガ
裁判上外國ト同一地位ニ至ラント必然要求ス
ル所アラント欲セハ日本國ノ法規ニ於テ先ツ
此ノ拷問ノ汚点ヲ除去サル可キハ明瞭タリ支
那及び日本國ヲ以テ我西洋人民ノ條約中域外
款條廢除論ニ就テ數多ノ外國委員ハ此ノ甚々
緊要ナル高議ヲ共ニ姑息ニ過ゴセシハ稍ヤ奇
怪ト謂ツベシ又若シ該委員ガ實ニ之レヲ姑息
ニ放過セザルナラバ之レヲ拒絶スルニ便益ナ

リト考做セシモ亦奇異ナリ。然リト虽モ支那日
本ノ兩國ニ通用サル、所拷問(甲)ト且ツ最モ惡
種ノ弊害(就中支那狀勢而シテ)カ第一着ニ律例ノ
部分ヲ組織スル裁判法ノ柔嫩ナル慈心(乙)トニ
我輩西方ノ國民ヲ委任セントスルモ域外權款
條ノ存セル國々ノ律例上右弊害多キ大汚点ガ
裁除サル、迄此域外法規ノ除移ヲ謀ルハ單ヘニ
空中ト爭鬪スルニ均シキ妄拳ナルヲ以テ其行
ハレ難キト甚々明白ナリ是等弊害ニ浸潤セル
諸國ノ為ニ辨解スルハ容易ナルト更ニ疑フベ

キ所ナシ何トナレバ彼等国民ヲシテ實ニ數十
百年間之レヲ以テ認許セシタル法規タリシ所ノ大
不條理ヲ一齊足ニ覺了セシメント下期望シ能ハ
ザルガ故ナリ然レモ吾輩仍ホ實際ノ處置ヲ知
ラザルニ因リ且又遙カ進涉セシ関化ノ高熱ヲ
リ之レヲ論ゼサルニ因テ其確乎タル辨解ヲ成
ス能ハザルナリ大約一十年前ニ日本政府ハ合衆
國政府ニ對シテ西國條約中ノ域外款條ヲ除去
スルノ問議ヲ公然稟呈セリ而シテ合衆國々務
卿ノ答辭ハ光明正大ナリキ而シテ其意見ニ規

日本ニ法理学ハ右問議ノ請求ニ充分應スヘキ
高度ニ進歩セシマヲ認メザリシトハ世人ノ回
想スベキ所ナリ日本國ハ合衆國ノ暗指セシ擬
醒ヲ中心悦服セルモノ、似シ是ヲ以テ関化ノ
進涉ヲ着ント欲スル者ハ日本國ガ現今其ノ裁
判法規ヲ改正セントナス企謀ノ成就ヲ希望ス
可シ然リ期ノ如クニシテ日本國ノ特立國トシ
テ充分ナル形勢アルヲ認許スルニ堪エタリト
稱スベシ。

○外國人民ハ右ノ如ク成立セル法規規域外裁判

推ニ已レヲ倚頼スル日本國ノ責任ニ依テ救護
セラル、トヲ只管一般ニ喜悅セント疑フ所ナ
カル可シ該法規アルカ為ニ領事館ノ有司ニ人
員ヲ増シ且ツ開港場ノ大小ニ從ヒ夫々著シキ
裁廳設立ヲモ煩ハシ又其レガ為ニ大失費ヲ要
セリ加之内國人民カ我輩外國ノ一訟廳ニ訴訟
シテ冤枉ヲ伸ハサント乞来ラシニ若シ其適當
ニメ然モ公平ナル處置ヲ得ザリシト勸考スル
代ハ内外人民ノ際ニ屢次容易ナラザル不満足
ヲ生ズル等ノ弊害ヲ醸スニ至レリ。夫故ニ如何

ナル訴訟ニテモ若シ日本人民ガ其裁廳ニ各外
國人民夫々ヨリ訴フル件々ニ從ヒ公平ニ裁判
スルト云ハル、保証ヲ外國人ニ授与シ能フ所
ノ備アルトセハ域外權廢除論ニ至ルモ敢テ抗拒
セラルベキ理由無キトト憑倚スベシ夫故ニ日
本國ハ期ク灼然タル此論題ヲ執テ是等ノ機ニ
投セル各訴訟ノ方向ニ由テ改良進歩スルノ地
位ニ至ラント勸勉セルトヲ發見セシハ甚タ満
足スヘキ次第ナリ。又日本ハ該裁判權ノミナラ
ズ自餘ノ件々ニ至テモ支那ト甚タシク相反對

セリ、支那ニ於テモ域外裁判權ニ付テ之レヲ除
カレントテ數回日本ノ如ク同一ノ苦情ヲ述ラ
レタリ然レモ自國ノ裁判取扱上ニ完備ノ律例
甚タ乏シク加旃苛酷ナル法規アルモ是等ヲ補
正改良スルノ果斷アラザルナリ、支那若シ兒戲
無用ノ譏罵ヲ恣ニセンヨリ寧ロ日本ノ故智ニ
模倣セント努力スルハ可ナリト雖支那自ラ亦
之レヲ担任負荷スルヲ中心欲セザレバ開明國
タルノ推理ヲ得ル一能ハサルベシ、

（倫頓及ビ支那電信）

保護稅說引証

千八百七十七年一月六日發行

此東京タイムズ新聞紙上別所ニ掲ケタル英國
新聞誌拔萃ノ叙録ヲ檢閲セラレヨ個ハ通常保
護稅論策ノ名ヲ以テ普知セラレ、說ニ付テ民
心ノ好尚ニ變遷アルトテ明示セルモノナリ、其
初數年間談論策ノ實施ニ付テハ斯ク緊切ナル
論ナルヲ以テ正ニ嚴シク恰好スヘキ為叮嚀及
復ヲ厭スシテ之レヲ檢査スルニ至極注意セリ、
諸此議論ノ怪然タル起原ハ彼ノ「フイラデルヒ
ヤ」府米國大博覽會ニ擺列セシ物品中鉄道ノ「

エル「鍊ヨリ巴理產」即チ美飾玩弄品ニ至ルマテ
各色ノ製造ニ於テ迅速ナル進歩ノ徵候ヲノ英
國ノ視察家ニ目撃セシメタル功驗ニメ稍驚訝
スヘキモノナリ「タイムス」(倫敦新聞紙ノ一世)及
ビ自餘ノ新聞誌ニ載セタル此等意外ノ開進頭
出ヲ公認シタル巧智老成人ヨリ到接セシ諸々
ノ通信書ヲ再出セシテ吾人ノ能クスル所ニア
ラザルベシ且又其追伸シタル種々ノ注解ハ通
常新聞紙ノ幅員ニ刊行シ得ヘキ尤ヨリモ尚長
文ナルベシ其指示セル所ノ定見ハ總テ吾人カ

撰ビタル徵候書

ニ於テ縷述セリ

ニ於テカ保護稅說モ饒舌家ノ譏誚ヲ受クルノ
的タルヲ免ガル而メ其驚歎スヘキ結果ハ同心
合意ト贊稱トヲ以テ認可セラレタリ是レ人間
社會ノ應ニ設クベキノ問題ニ接近セシハ有
ル可ラザルノ精神ナリ平生此國(本)ノ為緊切ナ
ル保護稅論ノ干係ヲ論壇ニ革戰スルニ方テ其
善ク模倣セラル、ヲ吾人が悦喜スル所ノ精神
ヲ云フ此論ノ既ニ久シク日本ニ於テ熱心憤勵
シテ注意セサル可ラザル一ノ確據ヲ乘テ吾人

先ツ茲ニ突然英國人判決ノ改正ニ付其徵候ヲ
表明スルヲ以テ必要ナリト思ハザル可ク保
護稅論ヲ貴重スル英米ノ勸考ト自由貿易ノ勸
考ト^評常一般ニ唱スル主義ハ只日本人民并ニ羈
旅人ノ此國ニ適應セル一論策ヲ採用セシメン
ガ爲ニ誘導シ得ル丈ハ肝腎ナリ。是迄淹シカ保
護稅論ヲ遵守シテ伶俐ナル論者ハ大概合衆國
人ニメ其政府ヨリモ應分入誘掖ヲ每ヘタリ。該
道理ニ勵シク抵抗セシ人民ハ獨り英吉利而已
ナリ。是故ニ吾人ハ彼ノ英國ニ於テ首倡者タル

官憲ノ我米人ヨリ總シテ要求セシ所ノ十中八
九ヲ數年來辭避セシモ遂ニハ許認セシコトヲ觀
ル片内地產業ヲ開進スルコトノ方向ニ於テ保護
稅ヲ以テ完全シ得ベキニ至ルヤノ爭論ハ忠實
ニ結了シ以テ公告サルベシ^{前ニ}也^中
此叙論ニ就テハ該有力ナル新聞紙ガ未タ曾テ
輿說ノ先達トメ立ツコトヲ欲セザル理ヲ奇妙ニ
著セリ。其使々タル現題ニ付テ人間社會^{殊ニ日}
^指ノ最良感觸ノ實況ヲ寧口回想シテ且ツ再出
スルニ足レリ。先ツ試ミニ本論ノ題旨ニ付テ述

ブル所ヲ以テ經濟ノ學壞ニ於テ卓見アル穿鑿
ノ公告ト看做スベカラズ然レモ英國人中^{過半}談説
ヲ回想セシ~~多數~~確乎タル信用ト看ルベシ。個
ハ勿論自由貿易ノ功カニ其忠誠ヲ瞬間時モ棄
テザルナリ。是レ望ム能ハザルモノナレモ保護
稅說ノ爲メニ米國天然產業ノ僅ク數名開^{英國}
人^{信用}得ル程大^ニ開^後發^成セル有^様ニ至
ル^一ヲ明白ニ認了セザルナリ。一年間ゼタイ
ムスハ既ニ已ニ何人ニ對スルモ實際利益ヨリ
起^ル一^行ノ思想^モ保^護稅^制ヨリ出^ル

快ニハセント、ホ^ルル^(英國大加蓋)院ヲ速カニ
毀^ツノ企テテ公告スベシ

日本帝國

千八百七十七年一月六日發行

○ 其之レヲ記念ニ保存センガ爲メ就中人民品行
 ト實體有形ノ進歩方向ニ於テ是ノ帝國ノ熱心
 勵精力ヲ認識シ得ニ爲一定志ヲ認了スル所ノ新
 聞紙ヲ起立スルニ目今ヲ以テ最モ好機會トス
 此新年タルヤ日本ニ必ス繁榮多吉ヲ現出スル
 ニ国内ノ整齊外交和熟等ノ如キハ帝室ヲ現ノ
 京城(江戶)ニ遷セシヨリ以降未タ曾テ茲ニ及べル
 モノ有ラザルナリ。曩ニ輓近記憶スヘキ掛喪氣



金誌モ發給仕テ...

地方騷擾ノ時ニ際セシニ一モ悲酸ノ跡ヲ觀ル
ベキナシ但シ是等ノ變時ニ於テヤ政府ノ穩當
ナル進捗ヲメ其企望セシ所ヲ果サシムルヲ全
ク中止セリ而メ假令完全正義ナラザルモ国君
ノ參政大臣ガ拮据施行スル線路ニ付キ不順ナ
ル批評者ヲメ感動セシムルヲ妨碍セリ是等
臨時ノ混雜ハ屢次外國視察者流ノ或ハ誤解ス
ル所ト爲リ或ハ其結末如何ヲ過慮セラレ、ニ
至テハ一概ニ抹却シ難シ又個ハ曾テ其最モ凶
兆ナル結果ヲ現ハセシモノ、如ク思ハレタリ

然レ氏之ガ爲ニ平生災厄ノ踵キ起ルヲナキヲ
以テ公平ナル審察ニ由レハ民情ニ於テモ國論
策ニモ大改革ノ万止ム能ハサルノ陪伴トメ之
レヲ觀ル者漸次ニ加フルニ至レリ然リ而メ假
令偶々同一ナル事變ノ平生必ス無カラザル可
ラザル如キ不便且ツ凄慘ナルモ政務施行上ノ
謬誤未タ茲ニ及バズ又此國家ニ凶災ノ標徴ア
ルヲナシ、其所謂混雜ナルモノハ此國ガ平素非
常ノ神速ト軟縮カヲ以テ其意表ニ出テタリ、預
期セル最後ノ混雜仍未タ頭ハレザルナリ若シ

將來再び演戲セラルルハ鄭重之レヲ睥了ス
ベシ而メ威嚴ナル試看ヲ以テ無要ノ兆候ヲ捕
捉スルヲ要セザルベシ。

方今ノ清明隆盛ナル前條臨時困難ノ黒雲ヲ以
テ遮蔽スル所ナシ。百揆皆現ニ光彩アリテ吾人
カ之レヲ預想スル大ハ外觀モ亦齊シク光輝ア
リ。偶然ニメ来襲スル所ノ難事アレバ治者ノ号
令ニ於ケル方法機智以テ之レニ當リ且又一時
ニ攪擾サレザル所ノ一般信用ノ覺悟ヲ以テ之
レニ應スベシ。國事ノ一洗整齊ヲ閑發セシ所或

ハ偶然不快ナル形跡ヲ回顧スレバ吾人ハ其形
跡ニ永久ノ弊害ヲ遺サバノ事體ニ満足スヘ
キ理由多キヲ觀ル。維新政府ノ尔来履歷セル奉
勤ヲ配列シテ其最モ勵精セル顯著ナル者ヲ回
想スレバ其中僅少ナリト虽實ニ中心慶賀スベ
キノ餘地ヲ又以テ觀ルニ足レリ。隔處ノ開進ヲ
舎イテ表皮ノ干涉ヲ以テ直ニ其奉勤ニ調和セ
シ者ハ實ニ驚異スヘキ裡宇内ノ留心スル所ヲ
採レリ。而メ其奉勤殆ント好都合ヲ得テ赫々々
ル成績居多ナリ。四個年来日本ニ完全セル諸善

業ノ論ニ付テ今民心不同意ナルモノ僅々散見
ス曰ク夫レ善業ハ獨リ此日本一國ノミナラス
又諸國大概深密ナル關涉ヲ有セリ吾人ハ其風
ヲ屢マセル禍成ノ事跡ヲ以テ時運ト唱スル蕩
然タル意思ニ敏着スルハ如何ク風俗ナリシマ總
シテ記臆シ得實ニ此時運ナルモノカ全ク日本
ノ努力スル所ヲ佑助シ國人行爲ノカハ一モ其
成得タル所ノモノヲ以テ做スベキナカリキ
運命カ夫ノ麻申奴隸賣買ニ一拳打ヲ每ヘタル
マリヤルツ船ノ紛乱ニ於テモ日本政府ヲ助ケ

時運ガ彼ノ大使副島ヲ助ケテ支那帝謁見論ヲ
完結セシメタリ個ハ自餘各國ノ使臣モ未タ之
レヲ整便スルヲ能ハザリシ論ナリキ偶事ガ他
國本是即チ日未襲ノ兵ナレ氏克服スルヲナキ相
匹敵セル彼ノ台湾人追討ノ陣中ニ西郷ヲ扶助
セリ偶然急性硬頸ガ北京ノ外交爭論ニ大久保
ヲ扶了シ僅々數週間ノ辯論ニメ彼ノ世界隨一
ノ頑固政府ヲノ屢々他國代辯官モ之レヲ數閱
月ニ必ス再ビ保擔スルヲ能ハズト看做セシ所
條約ヲ締盟セシメタリ然リ而ノ又遂ニ彼ノ朝

鮮ノ必然掌管シ能ハザル所ノ景況カ此国(和)修
交通信セリト而ノ其使臣黒田ヲノ該險事ヲ奏
起且ツ行フヘキ者(即本也)ノ黨ニ一モ巧思ト努
カヲ施行スル所ナク朝鮮ヲメ開港セシメタル
ハ豈偉功ナラスヤ。是類ノ論理ハ(愚者)ニ征韓黨
同復吾人ノ信スル所ニ憑レハ到底除カレ而ノ思
慮ナク之レヲ使用セント欲セシ徒モ衰壞執拗
ノナク但事情ニ付テ緘黙明理内心自問自答
ニ駁倒シ了セリ。爾来日本ノ着手セシ所右ノ外
他事ナクンバ皆之トテ恭敬スルニ足ル此国所

中不注意ヨリ起ル誤解ノ輕拳ト決要ヨリ釀
セル詆毀等一モ吾輩公刊記者ヲノ記憶セシム
ベキ班跟ノ更ニ遺存スベキナシ。
假令郷響應ト本質ヨリ見ル片ハ缺少アリト虽殊
異ト優勝ニ就テハ溝渠ヲ貫イテ近日開カレタ
ル明智ト修理ノ進歩セシ所ノ同情及ビ應許ニ
對シテ定要問アルナリ。日本技術ト機械精鍊ノ
表明セル者ニ由テ生シタル功驗ハ夫ノ世界大
博覽會ノ二個所ニ於テ爾来全然ヲ解セラレ、
右ヨリ廣ク且ツ貴トキ名聞ヲ博シ得タリ。然リ

虽其確乎タル指明ハ遠カラスシテ受クル所
アラシ、其進歩ヤ漸々ナルモ決シテ中止スル
ナク日本カ通國万民利益ノ爲ニ誘導セル手順
ハ其幼若ヲ訓練シ其未熟ナル實際改良スルノ
努力ニ由テ大智能ニ至ラントハ實ニ尊重スベ
キコナリ、海外諸國ノ仍ホ治理セル所ノ愛顧ト
懽恤ノ平生甚シク一和セル模様ニハアラスシ
テ夫ノ半保護ハ吾輩ガ日本ノ實功ヲ尚モ精当
ニ且ツ認識スルニ足ルノ日ニ起ルベシ、
ハ日本之レヲ暗ニ覚悟ス、或人曰ク日本ハ甚ク

自持擅行ヲ以テ之レゾ見解ヲ下スト、諛事件ニ
就テ日本ノ何ヲ以テカ斯迄遠ク成セル一ヲ善
ク満足セシトハ至極一様ナリ、日本ハ何故ニ満
足セザル可キヤ、此疑問ヲ起セル人々ヲメ日本
今日ノ有様ト拾ニケ年以前ト比較セシメヨ、
是ヨリ尚ホ奇異驚愕ニ且ツ微々タル傳記ノ之
シクアルガ上ニ斯ク實ニ高尙ナル定意ト最断決ヲ以テ
奏放シタル愛護ハ幾何ヤ其最ニ快捷ナル想像力
ノ描出シ得タリヤ、然ラバ其景況奈何アリシヤ吾人希ニ
語ルヲ要ス、其景況ノ大畧ハ即チ政府ノ以テ孱

弱ニメ紀綱弛又人民ニ^其幸ナラザルモ苛
刺ナル藩屏諸候ヨリ厥制ヲ受テ自由進退ノ希
望ヲ辭避シ一國ニメ内ハ競爭^其攻スノ良心ニ
淹悶シ外ヨリハ新奇不測ノ危險ヲ以テ驚愕シ
是レカ為ニ外見破壊ナキニ似タルノ損害ヨリ
露出スベキ該國精神ヲ^其試驗セリ然リ今ヤ世界
諸國ト友誼恭敬ノ交際ヲ行フノ一帝國ニメ其
幼稚ハ深切ニ教育ト自由ノ正路ニ誘引サル是
レニ因テ其賦學問ノ才力ハ其益ヲ得ル勢威
ヲ充シ管治者ノ一^其ヲ見ルニ深ク其擔任ス

所ニ曉了^其常ニ自^其ノ思想ヲ以テ之レ^其得^其
ルニアラ^其然モ偶然ノ禍患ニ依テモ心^其
ス而ノ忽然勲勞アルモ傲慢ヲ現ハサズメ堅守
ニ拔以テ之^其得ルニ勉勵シ虔誠ト銳剛ヲ以
テ信用ヲ口メタル本務ヲ奉行スルニ自任ト勇
敢ニ付テ小心翼翼タリ^其夫レ如此ノ日本今日ノ
形情ナリ該形情ヲ探査セント欲スル者ヲ日本
ノ表号ナル太陽ノ上ニ^其斑^其見セシメヨ又
他日ニ在テ口形情^其供スルヲ吾
輩ノ必要科業^其ス然^其見ニ方

総テノ人情ノ人類

ヨリ復歸セハ吾輩ハ

大

ハシラ観シノ

ニ本性

